

編集後記

e-Magazine 第13号をお届けします。梅雨の季節がやってきました。お元気でしょうか。相変わらず、世界も気候も平穏になりません。あちこちで異常気象が続き、日本列島は激震中です。内外にわたって、激動の時代は今年も続くのでしょうか。

今回はまず第1に、いよいよ本年末に迫ったASEAN経済共同体の成立に関する問題を取り上げています。様々な意見がある中で、果たしてASEAN経済共同体は曲がりなりにも成立させられるのだろうか、かりに成立するとしても、そこにはいかなる問題があるのだろうか、などを中心に幅広く考察するものであります。ASEAN共同体については、日本企業にとっても重要な意味を持つだけに、期待する向きも多いことと思います。

また、最近しばしば新聞などでも話題になっている低成長段階に入った中国経済の行方はいかなるものであろうか、という多くの方々の関心事についての中国経済の専門家による考察です。筆者によれば、中国が中所得の罠に陥るのはずっと先の話だということですが、だからと言って、現状だけに気を取られていると、今後さらに低成長に入った時、あわてて手を打とうとしても、そう簡単ではないように感じます。既にそうした状況に陥ってしまった、中南米諸国やアジアではマレーシア、タイなどが簡単に脱却できないでいる状況から見ても、中長期的視点から手を打つべきではないかと感じます。また経済分析は統計分析に依存することが多いのですが、統計はあくまでも過去のことです。過去の延長線上に常に現実経済が存続するわけではないことを、経済分析ではどう説明するのか、常に疑問に感じているところですが、経済学者の意見をお聞きしたいところです。それらの点は今後の筆者の研究に期待したいと思います。

そうした疑問や問題にもかかわらず、ASEAN経済共同体や中国経済の動向は多くの人に関心を持っているという意味でも、タイムリーな論考といえるでしょう。こうしたタイムリーな論考と並んで、われわれは常に歴史を忘れるべきではないですね。現在が歴史の延長線上に存在することは紛れもない事実だから、歴史を忘れると必ずしっぺ返しを食らうことになるからです。言うまでもないが、特に、われわれ日本人が忘れてしまっている、植民地時代の日中、日韓に関わる問題は重要であろう。ここで取り上げるのは、植民地時代に韓国で活躍した外交官の若松兎三郎の話を、長年研究している永野氏に書いてもらった。綿花は繊維産業にとって決定的に重要なものであった。当時、世界で圧倒的に生産量が多い棉花は南米原産のアップランド棉という陸地棉で、米国で品種改良された棉種で世界棉花の約90%のシェアを持っていた。筆者によれば、陸地棉は繊維が細く長く、強く、そしてねばりがあり、光沢のある、伸張性に富む棉花として紡績業界では評価が高かった。日本政府は日本で初めて、1874年に米国から陸地棉の種子を輸

入して東京の内藤新宿試験場で試作させた後、各地で試作したが、成功しなかった。そこで、彼は木浦・高下島に目を付け、これを若松は成功させた。ここを若松は「平和」と「共生」の島にしようと構想した、という。この構想は、文字通り、若松（当時、領事）が当初、日本と韓国の両方にとって利益となることは何だろう、と考えたことの実践であった。こうした考えの下で、筆者は今後何回かにわたって、若松兎三郎の活躍を書く予定にしており、楽しみな論考です。

もう1つは、文章は短いですが、ミャンマーから日本に来て、日本の大学を卒業し、いまは情報企画関連の仕事をしているコンさんという、若いミャンマー女性に日本で学んだことは何か、日本をどう見ているか、などについて率直に書いていただいた。見る人が違えば、日本は違って見えてくる、ということであろうか。最後にちくりと日本の痛いところもついており、なかなか面白い文章です。

何度もこの欄で書いたが、この *e-Magazine* への投稿は自由です。編集者としては、どんな文章でも大歓迎です。また、この *e-Magazine* へのご意見も自由にお寄せください。これまた大歓迎です。あなたはいま、何を考えていますか？